在特会の論理（12）

――在特会が多くの人に勇気を与えたというＬ氏の場合――

樋口直人

（徳島大学総合科学部）

Logics of *Zaitokukai* Activists (12)

The Case of Mr. L

HIGUCHI Naoto
University of Tokushima

１．経緯

在特会が有名になった１つの要因として、ヘイトスピーチの使用をためらわないことが挙げられる。それが大きな危機感を引き起こしており、法律家から出される差別禁止法制は、在特会などを少なからず意識するものとなっている。それ以前は石原慎太郎・東京都知事が主に念頭におかれており、現在は「上から」より「下から」のヘイトスピーチ規制が意識されるようになった。

筆者の聞き取りによれば、ヘイトスピーチを使う活動家自身は、「敵の強大さ」を理由としてためらいがちに正当化する傾向がある[1]。他方でそれに引き付けられ、それを意識的かつ積極的に用いる者もいる。本稿で取り上げるＬ氏（40 代男性）は、後者の典型であり、以下は 2011 年 11 月 26 日にＬ氏に対して実施した聞き取りを再構成したものである。

２．政治に対する関心

なかったですね。まったくと言っていいぐらいなかったですね。（選挙には）あんまり行かなかったですね。暇つぶしに「投票ってどんなんかな」ぐらいの感覚で、暇つぶしがてらに行ったことがあるくらいですね。（行かないことの方が）多かったですね。仕事があったりとか、友達と遊ぶとかあったら、それを優先させて。投票なんて、優先順位でいうと何もすることがない時くらいしか行かなかったですね。今も、行かないこともたまにはありますけど、日頃、投票に行くべきと言う建前もありますんで、一応行くようにしています。（変化したのは）この運動してからですね。政治のことを言っておきながら、自分が無関心で投票も行かないとしたら、具合悪いと思いますしね。2 年くらい前からですね。

（投票先は）支持政党――それが難しいとこなんですけどね、維新政党・新風が今のところ一番の支持政党です。まあ、ぶっちゃけ言いますと、自民党は支持していないんですけど、自民党に入れることが多いです。もう消去法ですね、これは。どれがマシかという基準で、悪いのから消して最後に残ったのに入れる。それで自民党に入れることが多いですね。昔からそうですね。選挙に行けば自民党に入れてました。昔から、自民党が何か言ったら野党は反対するだけ、そういうイメージしか政治に僕の理解がなかったので。

３．外国人との接点

クラスメートに朝鮮人が何人か、ぱらぱらいるくらいですね。まあ、名前でわかる子が多かったんで。

[1] 聞き取り内容とそれに対する筆者の立場や分析視点については、樋口（2012a, b, c, d, e, f）を参照。

（付き合いは）まったくないです。（それ以降も接点は）全然ないですね。僕自身が関心がなかったですね。僕自身の経験じゃないですけど、朝鮮人にお金払ってもらえないという話は、しばしば耳にすることはありましたから。自分は朝鮮人と仕事する時には、ちょっとその辺の、金のことには･･･幸い、僕が被害を受けたことはありません。僕も、こんなに朝鮮人にひどい目に合わされたという人に、一度でも会えばよかったんですが、なかったんですよ。

４．在特会に連なる関心

（以前から）ありました。大きいところでいくと、高校生くらいから始まりますね。いわゆる、僕ら自虐史観と言いますけど、自虐史観に対して僕自身、懐疑的な考え方を持っていました。例えば、歴史教育で日本は侵略したと、その辺（の時代）は僕もずっと好きだったんで、「そんなわけないだろ」ってわかっていたんですよ。僕自身、ちょっと興味があったので、戦争の本とかあったんですよ。純粋に日本がアメリカ相手に侵略なんか企てるはずがないと。

ちょっと専門的なことになりますけど、アメリカを占領しようと思ったら、地上軍上陸させて、首都陥落作戦を取らないきゃいけないんです。日中戦争でも、隣の大陸でもあれだけ軍隊を送ったら、点と線で補給路が確保できずに泥沼に入っているのに、アメリカなんて太平洋に補給路確保して地上部隊の上陸なんてできるはずがない。ということを、軍事的なことをやってましたんで、アメリカに侵略戦争を仕掛けたというのが、「そんなわけないだろ」ってわかってたんで。別にだからといって、授業中、先生に歯向かうとかそんなのは全然なかったですよ。まあ、子どもだましだなっていう感じで見てましたね。

神風特攻隊も――あれが、いやいや行かされて、母親とかプライベートなこと･･･とお涙頂戴的に語るのも（違和感があった）。僕は読んでましたんで･･･日本人は死ぬことに美意識持ってる民族性だから、これはありえると。我が子を助けるために自分の身を犠牲にして、我が子を助けるという美談が、日本にはありますからね。戦争ということに関して若干専門的な勉強したということで、中学生高校生が学校で教わるような薄っぺらい、あんなのは出鱈目というのは思ってましたね。だからといって思想的に、ということは全然なかったですよ。（新しい歴史教科書のときは）あの時はそれほど関心なかったですね。それほどは。

（歴史認識は）根底の部分では（在特会に）つながっているのかもしれませんね。ことさらに自分達の国を貶める方向に持っていかれて、気分が悪いなというのは、根底でつながっているのかもしれませんね。（それ以外には）全然ないですね。

10 年位前ですかね、（自分の）サイトが 10 年位前に開設してますので、一応、その時にはある程度愛国的な――愛国的なホームページではあるんですけど。最初は遊びで作ったサイトで、今でいうブログみたいなものですね。何か事件とかニュースがあったら、僕が愛国的な考え方から「これはこうだ」とか感じることを述べるみたいな感じで。

でもね、僕、面倒臭がり屋でちょろちょろっとやって、飽きたら 3 年 4 年書かなくなったりとかあるんですけど、一応続いています。作ることになったきっかけが、小渕恵三が総理だった時に、北朝鮮に米を支援すると言ったんです。拉致被害者が、拉致問題の進展なしに米の支援やめてくれとずっとお願いしながら、小渕が踏み切ったんです、米の支援に。その時に、僕も何かそういうことに力を貸したいなと思って、それでそのサイトを設立して。（拉致問題に対する関心は）途中からですけどね、昔からではないですけど。（小泉訪朝以前の）10 年位前には関心がありましたね。同胞がさらわれたっていう信じがたい事件があって･･･。普通に義務教育卒業した程度のあれがあれば、北朝鮮がやってるに決まってるだろって思ってましたんで。

５．在特会との邂逅

（外国人問題に対する関心を持ったきっかけ）桜井会長の動画を Youtube で見てからですね。あれは多分、3 年ぐらい（前）になると思いますけど。インターネットやってましたんで、その時に何かの暇つぶしかなにかで、時間つぶしで巡回いうんですかね、ネットで暇つぶしで検索とかしてると･･･。何かのはずみに Youtube の動画サイトで、桜井会長の動画をたまたま見てしまいまして、面白い人がいると。その関連動画、他にも検索していって影響されてますね。一番最初見たのは、外国人地方参政権ですかね。3 年前の春くらいですかね。朝鮮人が地方参政

権よこせってデモを何千人かやっている中で、会長が30人くらいで抗議する動画でしたね。そこで桜井会長が、「ゴミはゴミ箱に、朝鮮人は朝鮮半島に」と叫んでましたね。なかなか･･･公衆の面前で面白いこという人だなと思って。（関連動画を）どんどん見ていって、それから在特会の存在を知って、在特会のホームページに行って、決起集会とかなんかがあったので、それを見て。ああ、なるほどなるほど、言っていること間違えてないだろうって。

（動画を見たのは）全然偶然でしたね。普通に（Youtube を）見てて。どうして行ったんでしょうね･･･。今となってははっきり覚えてませんけど、どっか見てて「こんなへんな奴がいる」って感じでリンクを貼ったのをたまたまクリックしたとか、そんなんでしょうね。暇つぶしにパソコンでネットをやってれば、何かのはずみに見つけたって感じですね。ネットは10年ぐらいやってますね。（使っているのは）趣味です。

（その後は）何もしなかったんですけどね。それで、3年前の12月に桜井会長が地元に来るって告知があったんですよ。それで地元だったら自分も参加できるって。それに参加させてもらったのが一番最初ですね。（参加したのは）自分の家の近所でありましたんで。（政治活動の経験は）全然ないですね。（ハードルは）感じなかったですね。その時は。桜井会長が好きだったんで、桜井会長の実物に会えるってことならば。（入会時も躊躇は）全然ありませんでしたね。何するか、僕もそんなに何も知らずに行きましたけど、街宣とかいろいろやってましたね。（参加して）楽しい思い（が）できましたね。初めての経験だったんで。そういう運動をこれまでやってきてる人間と初めて話もして、「ああなるほど」と思いながら。で、僕もこれから協力していこうかなという気になって。

（12月の次に参加したのは）元旦ですね。護国神社で昇殿参拝と、河野談話の白紙撤回の署名活動するってメールが来ましたんで。僕自身も護国神社、元旦なんで行きたいなというのもあって、ついでだし――ついでというと申し訳ないけど、僕も行きたいと思ってましたんで。それまで近所の神社の初詣はありましたけど、護国神社というのはなかったですね。

（定期的に参加するようになったのは）元旦行って、春のゴールデンウィークくらいからですね。外国人地方参政権のデモなんですけど、その時は在特会が全国でデモするって･･･だったんですね。そこでちょっとAさんと話して、話の流れから6月13日に地方参政権反対のデモする、という連絡が来まして。それなら参加しますと。その時に内々で、運営に参加しないかと話をふられてましてね、「運営、構いませんよ」と返事してたんですよ。

（実際に入ってみてのギャップ）は一番最初に感じましたね。やっぱり僕とか、右翼のイメージがありましたんで。ちょっとこうね、黒い車乗って大騒ぎするような怖い方々が多いんじゃないかなというイメージは持ってましたけど。それもね、全然違うんだなって。（これまで）仕事とか何かで、右翼の人間は何人かいましたけどね、知り合いに。本当の愛国的な、そんなんじゃなしに、チンピラの右翼はね。だから、僕の中では右翼ってヤクザと一緒だろう、ぐらいな。仕事でたまに来るんですよ、右翼が。資料購入してくれとか、ああいうイメージ。話聞いたら3万円くらいで薄っぺらい本かなにか知らないけど、せいぜい500円か1000円でできるような冊子を、3万円くらいで置いていって。昔は近隣対策とかいう名目で出ていたみたいですね。今はもうそんなの出ないですけどね、僕の知る限りでは。僕も断ってますけどね。

今、ヤクザが――ヤクザが来て、頭を下げて「何とかこっちの顔もあるし、どうにかなりませんかね」って頭下げる。ヤクザが頭下げて、それでもこっちが「何とか応えたいんですが、こっちも予算ぎりぎりで、出せないわ」。ヤクザが「そうですか」と帰っていきますからね。昔だったら、そうなったらすぐベンツを持って来て車汚れたとか、そういったイメージがあるけど、今はヤクザが頭下げて「ちょっとでも出してくれないか」と言って、無理と言うと何も言いませんよ。ヤクザは法律でがんじがらめですからね。ヤクザもカタギを襲ったら取り締まるべきでしょうけど、外国系のマフィアとかあんなのが暴れた時に、国内のヤクザをあまり押さえつけたら･･･と思ったりはしますけどね。

（ネットでの活動は）基本的には継続しましたけど、ちょっと減っていきましたね。激しく活動しましたんでね。本当に、月に10日くらいなんやかんやで――準備とかもありますんでね。本当、何回もや

ってましたね。仕事ができなくなりましたんでね。だから、収入が減りましたんでね。それまで割と自由に使いたい放題だった小遣いが減りましたね。だから余計な趣味とかはどんどんやめていってますね。活動で手間隙とられますんでね。それでもいいと思ってやってますね。それだけ国が大変な時なんで、自分の生活守って国が滅んだら元も子もないんでね。そう思ってやってますね。

６．運動の動機と手応え

（そこまで活動したのはどうしてか）しないとしょうがないな、と勝手に思いましたね。（活動は）面倒ですよ。デモとか面倒です。（動機は）まあ、愛国心としかいいようがないですね。国が大変だと思ったら、日本が好きなんでできるだけのことをしたい、日本のためにしたいと思って。自己犠牲であるとか、公共の利益のために自己を犠牲にするとか、そういうボランティア精神ですね。（愛国心という自覚は）あります、実は。昔からではないですけど、この運動始めてからですね。

自慢する気は全然ないんですけど、僕らがあれだけやったから――伸びていく時期に入っていったんでなしに、僕らがやったから伸びたってことですよね。自慢でも何でもないんですけど。あれ（動画）で多くの人が見てくれて。で、一気に伸びていったと思います。あれで世間に――多くの日本人に勇気を与えることができましたし、日本人の――ちょっとこうね、目覚めるためのきっかけの1個は与えたんじゃないかなと。

人間がどんどんどんどん増えて、これだけ大きくなりましたんで。僕がやり始めた頃なんか、僕らがいなかったらこの活動が終わってしまう可能性がありましたけど、今でしたら僕らに仮に何かあっても活動は誰かが引き継いで、どんどん継続されて･･･。

（活動の）手応えはあります。まあ、朝鮮学校の無償化の時も朝鮮人が役所に行って大勢で押しかけて座り込みとか、そんなのもできなかったのは僕らがいるからだと思いますね。それまで街中で「ほらチョンコ、出て来いや」とか言ったら、朝鮮人が大勢で襲ってきて怖い目にあうという都市伝説がまわって来てますけど、散々僕らがやって全然平気だと。そういった、それまで当たり前だった思われてきた価値観も、そうじゃないんだなって思われるとか。で、僕ら一般市民が日の丸もってデモするのもおかしくないって、10年位前にその辺の主婦とかが集まって日の丸持ってデモするなんか、まず考えられなかったことが。それが頻繁に、いろんな団体が日の丸持ってデモやってますんで。

パフォーマンスも含めて世間でいう過激なという表現･･･やってましたんでね。動画配信しますので、多くの人に動画を見てもらおうと思ったら、駅前でマイクでしゃべってるだけでは誰も見てくれない。そういうのがあって、僕らの活動知ってもらうとなったら、まずは動画を、政治に無関心な人間に見てもらうことから、ちょっと危ないところに行って「チョンコ出て来い」とかインパクトがあって、過激なパフォーマンスを。

７．外国人参政権について

（外国人参政権について知ったのは）この活動やってからですね。（それ以前は）関心なかったですね。（あることも）知りませんでしたね。関連動画で見ていくうちに、なぜ地方参政権に反対かという意見を聞きましたんで。それをそのまま受け売りになりますけど、こんなもの絶対に認めたらいかんなと思って。それで反対になりましたね。52万（票）くらいですからね、数が多いですからね。その52万票がどれだけの――本当に悪意を持ってそれを悪用すれば、52万票でどれだけのことができるかっていうリスクを考えると、日本を滅ぼすことができるくらいの危険性があると。

あのね、はっきり言います。実は（外国人参政権は）重要に思ってません。外国人地方参政権を与えて、本当に朝鮮人が日本を乗っ取ろうと頑張っても、20年30年かかると思いますね。地方参政権もらって、次は被選挙権、立候補させろと。次は国政参政権を与えろと、どんどん獲得していって、いつか韓国籍のままの国会議員を50人100人送り込んで、自分達の法案を通して日本を操れるというところに持っていこうと思っても、20年30年。

もちろん、誤解してもらいたくないんですけど、20年30年、長い年月かけたらつぶれますよ。だから反対しますけど、差し迫った危険性というと、即効性の猛毒ではないと思います。それよりは、目の前にこの国を滅ぼしかねないような危険なものがもっとあると。（例えば）シナの国防動員法、人口侵略

ですね、シナ人の。日本が仮に滅びるとすれば、シナ人ですよね。朝鮮人に滅ぼされることは、まずないでしょうけど。

とりあえず在特会に入りましたんで、地方参政権に限らず在日特権すべてに反対しますので、そういう意味では在日特権の１個として（地方参政権に）反対する。僕の中では生活保護とかあんなのと同等くらいですね。より大きな問題は、シナの武力侵攻を含めた覇権ですよね。僕も大した力がないので、在特会として――考え方はいろいろあると思うんですけど、朝鮮人というのはシナ人の先兵くらいにしか思ってないので、朝鮮人と戦えないのにシナ人と戦えるわけないだろ、と。だから今は、シナ人のことを基本的には余力があったら取り組むけど、メインは朝鮮の問題でと考えてる。

（中国に対する関心は）まあ、オリンピックのあの辺ぐらいからでしょうね。わけのわからん国があると。チベットやウィグル、東トルキスタン、ああいうとこで残虐なことやってる連中が、いよいよ日本を視野に入れ始めて動き始めたっていうことですね。チベットのことはね、もっと早い時から僕も知ってましたんで――『ゴーマニズム宣言』読んでましたんで。『ゴーマニズム宣言』自体は昔から読んでましたけどね。活動の前から。初めは漫画という感覚で、娯楽の一環で読んでましたね。

さしあたって（関心があるの）は日本にいる在日ですね。さしあたっては。本国の方も、もちろんとんでもないですけど。反日で謝罪賠償でお金がほしいと言ってくるし、竹島の不法占拠も拉致問題もあるし。（在日外国人に対する反感は）昔はなかったですけどね。今は勉強して、来歴とか習慣、文化、民族性、そういうのを知ってますので、一日も早く日本から追い出したいなと思ってますけどね。

８．結語に代えて

L 氏は、在特会のなかでもっとも過激な部類に属するといえる。ヘイト・スピーチが一種のタブー破りであり、それにより勇気を与えたとまでいうのは、在特会のメンバーからみても常軌を逸しているというとこはあるだろう。ただし、彼は言葉だけでなく実際に仕事に支障を来たすほど活動にのめりこみ、活動が生活を変えてしまったという点で、Blee（2002）が調査した女性の白人至上主義活動家を想起させる。そこでは生活にも困窮する活動家が登場するが、それは活動の原因ではなく結果であり、活動したから職も友人も失っていくというキャリア・パスを歩んできた。

在特会は、公安警察の監視下にあるだけでなく、明らかに狙い撃ちされて逮捕されている。こうした統制は、在特会の活動力の低下に一方で結びついたのは間違いない。だが、統制はそれを恐れぬ活動家にはあまり効果的ではなく、かえって過激化をもたらす可能性もある。現実に、逮捕経験者が再逮捕されるような事件も起きており、今後は統制と過激化という観点からの分析も必要になるだろう。

文献

Blee, Kathleen M., 2002, *Inside Organized Racism: Women in the Hate Movement*, Berkeley: University of California Press.

樋口直人，2012a,「在特会の論理(1)〜(7)」『徳島大学社会科学研究』25 号.

――――，2012b,「在特会の論理(8)〜(9)」『徳島大学地域科学研究』1 号.

――――，2012c,「『行動する保守』の論理(1)〜(3)」『徳島大学地域科学研究』1 号.

――――，2012d,「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8 号.

――――，2012e,「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45 号.

――――，2012f,「排外主義運動のミクロ動員過程――なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9 号.

前田朗，2010,『ヘイト・クライム――憎悪犯罪が日本を滅ぼす』三一書房労働組合.

師岡康子，2012,「人種・民族差別禁止法の意義――日本における制定に向けて」『法学セミナー』57 巻 3 号.

（付記）科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。